



Tokyo Gakugei University Repository

東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

Title	地球市民としての意識を育てる音楽科教育（個人研究・共同研究）(fulltext)
Author(s)	居城,勝彦
Citation	東京学芸大学附属学校研究紀要, 45: 141-150
Issue Date	2018-09
URL	http://hdl.handle.net/2309/150119
Publisher	東京学芸大学附属学校研究会
Rights	

地球市民としての意識を育てる音楽科教育

東京学芸大学附属高等学校 居 城 勝 彦

目 次

1. 研究の目的と視点	142
2. 小学校における実践	142
2. 1 「音楽世界地図を作ろう」(小学校3年生：2015年実施)	142
2. 2 「音楽で世界を眺めよう」(小学校5年生：2013年度実施)	143
3. 中学校における実践	144
3. 1 「世界の音楽を聴こう」(中学校2年生：2008, 2009年実施)	144
3. 2. 和太鼓アンサンブルをつくろう (中学校2年生：2008, 2009年実施)	144
4. 高等学校における実践	145
4. 1 「サンバとブラジルの歴史」(高等学校1年生：2016年実施)	145
4. 2 もう1つの「Hallelujah」(高等学校2年生：2017年実施)	146
4. 3 「西洋音楽史と日本史のつながり」(高等学校1年生：2016年, 2017年実施)	147
5. 大学での実践	148
5. 1 「ハワイ語で歌う『涙そうそう』」(教育学部音楽科3年生)	148
6. 結語 - 音楽科で地球市民としての意識を育てるための視点 -	148

地球市民としての意識を育てる音楽科教育

東京学芸大学附属高等学校 居 城 勝 彦

1. 研究の目的と視点

現行の学習指導要領では、各学校段階を通して、音楽を愛好する心情を育て、音楽に対する感性を豊かにすることが求められている。これは次期指導要領にも受け継がれており、発達段階に合わせて音楽文化についての理解を深めることも、合わせて求められている。高等学校には、「生涯にわたり」という文言があるが、これは生涯学習社会における音楽的自立を目指すことを意味しており、「音楽文化について理解を深める」とは芸術科として音楽を人類の歴史的・社会的所産としてとらえることを意味している¹。

これまで小学校・中学校・高等学校での音楽に関わる実践においては、表現や鑑賞を通して親しむ、あるいは仲間とともに活動することを楽しむ音楽や楽曲には、その成立背景に人々の営みやそこに込められた思いがあることに気づかせ、音楽文化として大事に扱うことを心がけてきた。

国際理解教育の中で地球市民という言葉が使われだして久しいが、ここ数年の実践を通して地球市民という言葉が活動する児童生徒の姿と重なることが増えてきた。

そこで、本研究では、地球市民としての意識を育てるという視点からこれまで行った音楽を中心とした実践を振り返ることを試みる。そして今後の実践において地球市民としての意識を育てるために必要となる視点を考えたい。

地球市民についてはさまざまな説明の仕方があるが、本研究では宇田川晴義の4つのイメージを参考とした²。

1. 自己を育てた社会を理解し、自分を取り巻く社会の中でいかに生きるかの選択・決断ができる人。
2. 他者の人権を認め、共生の哲学に基づいて行動できる人。
3. 普遍的でグローバルな諸問題を自らの問題と考え、そして地球的視座に立って行動できる人。
4. 総合的な教養を持つ人。

2. 小学校における実践

2. 1 「音楽世界地図を作ろう」(小学校3年生：2015年実施)³

この活動は3年生の音楽科の学習のまとめとして、「自分たちが演奏する曲のよさを感じながら、仲間と息を合わせて演奏する。」「曲の作り手や大事にしてきた人たちの思いに気づき、その思いを大切にしながら演奏を楽しむ。」を目標として展開した。

まず、自分たちのレパートリーになっている曲とその成立背景などに関心を持たせることから始めた。児童たちにとっては、これまで総合的な学習の時間で継続的に取り組んだチャモロダンスで学習したことが転移し、そ

【小学校】

表現及び鑑賞の活動を通して、音楽を愛好する心情と音楽に対する感性を育てるとともに、音楽活動の基礎的な能力を培い、豊かな情操を養う。

【中学校】

表現及び鑑賞の幅広い活動を通して、音楽を愛好する心情を育てるとともに、音楽に対する感性を豊かにし、音楽活動の基礎的な能力を伸ばし、音楽文化についての理解を深め、豊かな情操を養う。

【高等学校：音楽Ⅰ】

音楽の幅広い活動を通して、生涯にわたり音楽を愛好する心情を育てるとともに、感性を高め、創造的な表現と鑑賞の能力を伸ばし、音楽文化についての理解を深める。

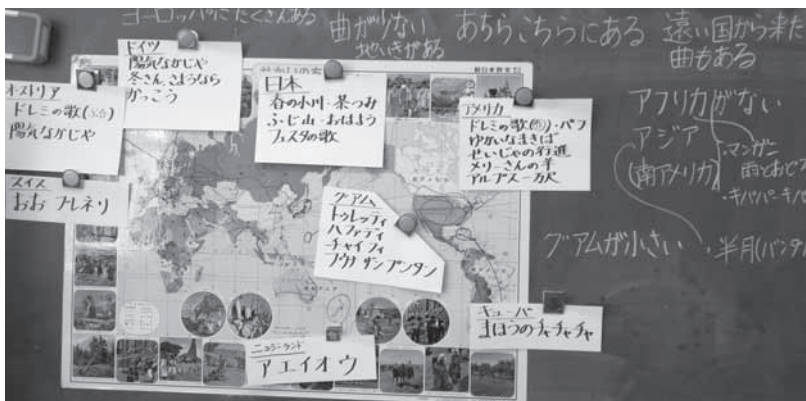
音楽科学習指導要領の目標

それぞれの曲を大事にしてきた人たちの思いに気づき演奏することが自然な活動となるだろうと構想した。活動の終末では、自分たちが表現活動として取り組んだレパートリーを世界地図上にマッピングし、「3-3音楽世界地図」を作成した。

児童たちは本活動で、レパートリーをマッピングすることを通し、まだレパートリーがない、あるいは少ない地域（アフリカ、アジア、ロシア、南米）があることに気づき、その地域を意識して自分たちのレパートリーを増やそうとした。そこで、教科書教材を活用してそれらの地域の楽曲を探し、クラスのレパートリーを増やしていった。児童たちの中には、その地域や楽曲そのものについての関心が高まり、日頃取り組んでいる自学ノートへの調べ学習として取り組み、自分が調べてきたことを発表する場面もあった。その発展として、音楽世界地図にあげられた国や地域について記載のある本を児童たちが学校図書館で集め、教室に別置図書として置くことになった。

一連の活動を通して、自分たちのレパートリーという足どりを地図によって視覚化し、それをさらに充実させたいという学習の志向性をクラス全体で意識することが可能になった。音楽科のカリキュラムでは4年生で「音楽で世界旅行」という活動を年間数回にわたって計画していた。本活動は、この「音楽で世界旅行」への継続・発展が、児童の内発的動機付けの点から自然におこなえることが期待された。また、異文化理解に関わる学習は高学年において文化の固有性に着目させる取り組みが多いが、歌を取り上げることにより、低学年でも自分たちとは違った言葉や表現をしている人たちの存在を意識することができる」と桐原は指摘しており⁴、中学年にふさわしい活動となった。

地球市民育成の視点から考えると、表現活動を楽しむ中に「どこの国や地域の曲だろう」という新たな視点を持ち込むことにより、自分たちが日頃接している音楽が世界のさまざまな地域のものであることや、その地域が欧米に偏っていることに気づいたことが、自己の育っている社会の音楽を理解し、自分を取り巻く音楽の中でいかに新たな音楽と出会っていくのかを選択・決断する経験となっている。また、調べ学習と関連させたことで小学校3年生なりに、音楽を始点とした総合的な教養を身につける機会ともなっている。



レパートリーを世界地図に並べて気づくこと

2. 2 「音楽で世界を眺めよう」（小学校5年生：2013年度実施）

5年生社会科の導入単元「わたしたちの暮らしと国土」で音楽科との教科横断的な学習として実施した。世界各地の音楽をCD⁵で流し、その音楽の地域を教科書の世界地図と世界各地の生活の様子を写した写真から選ぶという活動である。

児童たちはCDから流れる楽器の音色や音楽の雰囲気を手がかりに、教科書のページをめくりながら近くの友達とバズセッションを行っていた。日頃聞き慣れない音階で構成されている音楽や楽器の音色からは中東地域をイメージしやすいようで、東南アジアのガムランやアングルンの演奏も中東地域だと予想する児童が多かった。それに対して、欧米の音楽に関しては、ほぼ正解となっていた。

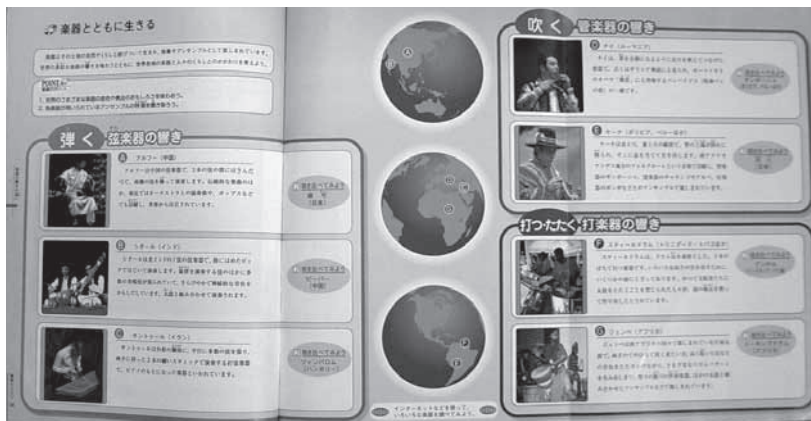
この様子から児童たちが接することの多い音楽は欧米を中心とした西洋音楽かそれをもととした日本の音楽で

あり、それ以外の音楽は何となく馴染みのない国や地方の音楽としてひとくくりになっていることがうかがえた。音楽の授業においても既習内容の中に世界各地の音楽は取り上げられているだろうが、それらの音楽は音楽の構成要素を切り口として取り上げられることが多く、人々の暮らしやその歴史に関わらせて学習することが小学校低中学年では少ないことも原因となっているであろう。授業の中ではそれぞれの音楽とその国や地域の暮らしの様子、日本とのつながりをあげていったが、この活動を通して児童たちは文字情報だけでなく音声情報としての音楽で国や地域をイメージすることができることも知る機会となった。

地球市民育成の視点から考えると、これまで自分の身近な所にあるものとしてとらえていた音楽について、人々の暮らしに合わせて、それぞれ地域の音楽があるということを知り、よりグローバルな視点で音楽と接する機会となったことが予想される。

3. 中学校における実践

3. 1 「世界の音楽を聴こう」(中学校2年生：2008, 2009年実施)⁶



教科書題材「楽器とともに生きる」⁷を活用し、世界各地の音楽から7種類を取り上げ、視聴した。教科書では弦楽器・管楽器・打楽器という種別になっているが、授業では「フォルクローレで用いられるチャランゴ(元々はアルマジロの胴体を使った弦楽器であるが、現在は木製)が、なぜ使われるようになったのか」という発問から西洋人によって音楽を禁じられたアンデスに住む人々が

ポンチョの中に楽器が隠せるようにギターを小型化したことから生まれたことについて触れた。

また、トリニダード・トバゴのスティールドラムの明るく迫力ある演奏も、アフリカからつれてこられた人々が支配者から太鼓を禁じられ、油の廃缶を使って作り出したことに触れたあと、彼らのルーツであるアフリカのジェンベの演奏を視聴した。

生徒たちにとっては、音楽が禁じられるということが意外だったようだ。彼らにとっては、異なる地域であるにも関わらず、人々がなんとかして音楽を生活の中に取り戻そうという共通した姿があったことを知る機会となった。

この活動は、世界の音楽の文化的多様性を知るとともに、その成立の背景に似たような歴史的状況があったことに気づくという、知識・理解目標を設定していた。

地球市民育成の視点から考えると、世界の音楽の中に普遍的でグローバルな視点でとらえると共通の歴史が存在することに気づき、その視点から新たに触れる音楽にも同様の問題がないか、あるいはそれ以外の問題があるのではないかという探究的な接し方をすることのきっかけになった。これは、グローバルな視点から諸問題を自らの問題と考え、そして地球的視座に立って行動することにつながると考えられる。

3. 2. 和太鼓アンサンブルをつくろう(中学校2年生：2008, 2009年実施)⁸

サンノゼ太鼓という日系人と太鼓グループの演奏を参考に、締太鼓と長胴太鼓を使ったアンサンブルをグループで創作して演奏を発表した後、日系人の歴史や演奏者の和太鼓演奏に対する思いについて考えた⁹。日系人の

歴史については紙芝居¹⁰をグループで読み合う活動で、情報を整理し、理解することとした。ここではメディアリテラシーや社会科の歴史学習で得た知識も活用された。学習の終末で「日系人とは…」や「日系人と太鼓とは…」というような共通の答えは導き出していないが、今まで考えることの無かった、日本から離れたところにある日本をも感じさせる音楽文化に気づき、自分なりに考えようとする機会となった。

この活動は音楽科の学習としては、和太鼓演奏の鑑賞から表現の特徴を感受する、和太鼓の演奏技能の習得する、仲間と協同しての作品を創作する、音楽的な表現の工夫をするという側面があるが、国際理解教育としては日本から離れたところにある日本らしい文化に気づくという目標と、紙芝居というメディアから必要な情報を獲得し、仲間との意見交換の中で自分の考えを持つという目標を設定した。また、全ての生徒を対象にすることは出来ないが、日系人と太鼓演奏者の帰属意識問題への気づきを発展させ、人間としての尊厳を考えるという目標の設定も可能であることがわかった。

地球市民育成の視点から考えると、戦中戦後の日系人が生きた社会を理解し、彼らを取り巻く社会の中で彼らがいかに生きるかの選択・決断をしてきたかを知り、その方法の一つとして音楽が存在することに気づくことを通し、自己を育てた社会を理解し、自分を取り巻く社会の中でいかに生きるかの選択・決断ができる視点をもつことにつながる事が期待できる。



サンノゼ太鼓（上）と移民を知るための紙芝居（下）

4. 高等学校における実践

4. 1 「サンバとブラジルの歴史」(高等学校1年生：2016年実施)

器楽合奏としてラテン楽器を活用したアンサンブル「Brazil」¹¹を演奏することから始めた。サンバの持つ音楽のグルーブ感を存分に体感した後、ブラジルについて知っていることを挙げさせた。生徒が挙げる内容はおおそ予想通りであった。それらを提示した後に、ブラジルに関するキーワードを追加した¹²。ブラジルの地理・歴史・経済に関わるもの、食べ物、子どもの遊び、音楽に関するものである。音楽に限らずさまざまな分野のキーワードを挙げたのは、知識として知っているブラジルで人々が生活していることを感じてほしい、そして国政や音楽が現状になるには、そこに

ブラジル



サンバ カーニバル
 オリンピック・パラリンピック
 サッカー コーヒー
 ポルトガル語 キリスト像
 アマゾン川 イグアスの滝

インディオ 日系
 ポン・デ・ケージョ
 パール・オウ・インパル
 バタタ・ケンチ カポエイラ
 マルキーニョ レアル
 メルコスール セラード
 ガロート ボサノバ **MPB**

人々の歴史があったことを生徒自身が既習事項を活用して再整理してほしいと願ったからである。音楽に関しては、サンバが奴隷から解放された黒人たちの文化と白人の音楽が融合することによって生まれたことに触れ、ティンバラダ楽団の演奏を鑑賞した¹³。また、サンバと同様に日本人にとってはブラジル音楽を代表するととらえられているボサノバや、それ以外のブラジル音楽についても触れた。さらに、黒人発祥の音楽を伴う舞踊文化としてカポエイラを取り上げ、奴隷制度廃止後の黒人たちの置かれていた社会状況¹⁴や、国が合法化しブラジル発祥の文化として認めて、現在では学校教育プログラムに取り入れられるようになったこと¹⁵にも触れた。

地球市民育成の視点から考えると、サンバを題材として存分に表現活動をした後、ブラジル社会を理解し、サンバが生まれた歴史的背景を知ること、かつての黒人奴隷の置かれた状況を人権の視点から考え、現在のブラジルではどのように共生の哲学に基づいた音楽文化が成立しているのかをカポエイラの鑑賞を通して知る機会となっている。また、これらの音楽や舞踊といった文化が自分たちの生活する日本でも広がり始めていることを認識し、世界の音楽と触れる機会がすぐ近くにあることを意識する機会にもなっている。

サンバ



- 1570年 黒人奴隷の輸入本格化
中部バイア地方サルヴァドールアフリカ貿易の集積地
- 1888年 奴隷制度廃止
黒人たちが職を求めて首都リオデジャネイロに移住し、アフリカとヨーロッパの文化が融合
- 1916年 「PELO TELEFONE」発売
- 1918年 カーニバルのテーマ曲になる

ボサノバ



- セルタネージョ
- ショーロ フレーヴォ
- マラカトゥ フォホー
- サンバヘギ
- MPB(ミュージカ・ポピュラー・ブラジレイロ)

カポエイラ

奴隷たちが支配者の目を逃れ、音楽に乗せて踊りの練習のように見せかけた格闘技

- 1888年 奴隷解放後も法律で禁止
- 1932年 合法化
- 2010年 憲法改正法令でブラジルで創造されたスポーツとして認知



ブラジルを知るために提示した情報

4. 2 もう1つの「Hallelujah」(高等学校2年生:2017年実施)

ヘンデル作曲オラトリオ「救世主」の中から「Hallelujah」を原曲とゴスペルアレンジの2通りで演奏した。原曲の演奏は、オーケストラ部の生徒の演奏に合わせ音楽選択の生徒が合唱することが、入学式・卒業式での恒例となっている。授業では1年生の3学期に、西洋音楽史の学習と絡めて「Hallelujah」を取りあげて演奏した。その経験を踏まえ2年生の1学期当初の授業で取りあげている。ゴスペルの説明では、この音楽は既習のサンバやカポエイラのように、黒人たちの移動に伴って生まれた音楽であることにも触れた。すると、以下のような学習感想の記述が見られた。

「はじめに聴いた時は、ふざけているのかと思いましたが、実際に歌ってみると自然とリズムにのって体が動き出すような感じで楽しかったです。」

新たな音楽、特に比較する対象となる音楽を知った上で新たな音楽に接する場合において、まず違和感を覚えることは大事なことであり、それを自分で否定しない姿勢を持つことは異文化を学ぶ姿勢にも通底する要素である。

「荘厳な雰囲気であった原曲から一転、陽気になった。リズム隊(打楽器)の存在感が強く、サンバ等に似ているように感じた。」

「ゴスペル版のHallelujahは、ラテン音楽に似た雰囲気があり、リズムカルで明るい感じがした。」

これらの感想には、既習のサンバとゴスペルの音楽的な共通点を見いだそうという視点が読み取れる。

「“きれいな音楽”というよりは、“一步はみだした音楽”という感じがした。(中略)きれいな音楽が成すハーモニーよりゴスペルの成すハーモニーの方が好きであった。何故だろう。堅苦しくないからか？ 枠にとられていないからか？ 自由であるからか？ 自由と書いたが、黒人が自由を求めた曲がゴスペルの起源であることから、本当の意味での自由さがゴスペルには含まれているからかもしれないと考えた。そして、その中でも美しさがあるのは、白人の賛美歌も同時に起源に持っているからだと考えた。」

この感想からは、音楽的な特徴の比較をした後、その違いを音楽の成立背景に結びつけて考えようとする姿勢が読み取れる。

この学習活動では、鑑賞活動とそれに伴う知識理解ではなく、表現活動としての手応え（ゴスペルのハーモニーとグルーブ感）を感じるまでの時間をかけた後に知識理解の場を設定したことにより、生徒自身の中で思考が深まっている様子が見られた。

地球市民育成の視点から考えると、ヒトの移動に伴う音楽の変容をグローバルな問題としてとらえ、既習経験と関連させながら地球的視座に立って思考することが行われている。また表現活動を通して体感したことと知識理解が結びつくことで、総合的な教養となっていくことが期待できる。

4. 3 「西洋音楽史と日本史のつながり」(高等学校1年生：2016年, 2017年実施)

西洋音楽史に関しては、鑑賞や歌唱の活動と関連させながら、各時代区分(古代ギリシャ、中世、ルネサンス、バロック、古典派、ロマン派、国民楽派、近代、現代)を20分から30分程度で解説している。15、16世紀のルネサンス期については教会音楽と世俗音楽を紹介した後、宗教改革と対抗宗教改革において教会音楽にどのような変化が起きたかについて触れている。「対抗宗教改革の流れは日本にどのような影響を及ぼしているか」という発問をするが、これに対して即答できる生徒はほぼいない。年代とキリスト教というキーワードから推測する生徒はいるが、自信を持って発言できる生徒はいなかった。そこで、「イエズス会」と「ザビエル」というキーワードを提示すると、一気に理解が進んでいった。日本へのキリスト教伝来が対抗宗教改革としてローマカトリックが広く世界に布教をした一端であること、そしてキリスト教伝来は教会音楽の伝来も意味することに言及した。多くの生徒にとって西洋音楽が日本に伝わったのは、明治時代に西洋文化が次々と入ってきた時期と認識している。1500年代にその当時ヨーロッパで奏でられていた西洋音楽が日本に伝わったことを知識として持っている生徒はほとんどいない。さらに、1579年にはセミナリヨとコレジョが九州に創設され、唱歌と器楽が科目として設定されたことが、日本で初めての音楽教育システムであることにも触れた。よって、織田信長や豊臣秀吉が西洋音楽を聴いていたこと、天正遣欧使節団の少年たちがヨーロッパの教会でオルガンやその他の楽器を遜色なく演奏していたことを初めて知る機会となった。その後のキリスト

対抗(反)宗教改革の中の音楽

- ・トレント公会議(1545～63)で教会音楽に関する改革が明文化

情緒性の強いマドリガーレ風な作品を廃止
歌詞のわかりやすさ、表現の品位を重視
ミサ曲における世俗的な定旋律引用の排除
多声音楽を単旋律音楽に戻すことも検討されたが、多声音楽は許容された

→ローマ楽派の活躍

日本への影響

- ・イエズス会 フランシスコ・ザビエル
カトリックを全世界に広めようとする動きの1つ
- ・1551年 周防大名 大内義隆にクラヴオを献上
1557年 聖歌隊が組織され、音楽教育も組織的に
行われた
- ・1582年 天正少年遣欧使節 王侯貴族の前で演奏、
帰国後豊臣秀吉に演奏
- ・1629年 大村藩の牢内で少女らが聖歌を歌って慰
め合った(以後、記録・楽器など消滅)
- ・長崎県生月島では「歌オラシャ」として歌い継が
れている

対抗宗教改革を知るために提示した情報

教弾圧についての知識は持っているが、当時日本に入っていた楽器や楽譜を含めて西洋音楽が根絶やしにされたこと、そのような時代の中でも隠れキリシタンが「オラシャ」としてグレゴリオ聖歌を脈々と歌い継いでいることが調査から明らかになっていることは、初めて知る生徒が多かった¹⁶。

本校の教育課程では、地歴科の履修が1年生：日本史A，2年生：世界史Aとなっている。すなわち、生徒たちにとってはキリスト教伝来周辺の時代は中学校までの既習内容と関連させて理解していることになる。生徒たちにとっては3年生で日本史Bまたは世界史Bを履修することで歴史の流れの中に音楽科での既習事項を結びつけていくことが期待される。

地球市民育成の視点から考えると、西洋音楽史と日本の歴史との新たな接点に気づくことが、総合的な教養としての歴史認識を持つきっかけになることが期待できる。

5. 大学での実践

5. 1 「ハワイ語で歌う『涙そうそう』」(教育学部音楽科3年生)

数年来、東京学芸大学教育学部中等教育教員養成課程音楽科専攻3年生を対象とした教育実習事前指導の中で、中学校・高等学校の授業設計という講義を担当している。9月に初めての教育実習に出る学生たちに対して、毎年6月頃に実施している講義である。この講義では受講している学生を中学生と設定し、20分程度の授業を3本行い、授業者としてどのように授業を構想し、実際に中学生と活動しているのかを体験してもらっている。その中で中学2年生を想定して、次のような授業をしている。

この活動の目標は、楽曲の成立背景の理解や国際理解を意識した歌唱指導について体験することである。まずは教科書教材である「涙そうそう」¹⁷を歌唱する。次に、この曲が原曲となっている「KA NOHONA PILI KAI」¹⁸を鑑賞し、ハワイ語で横書きされた歌詞のみを見て歌唱する。

中学校や高等学校の音楽では日本語だけでなく、外国語で歌唱する活動もよく行われる。生徒にとって「外国語で歌う」ということの意味と生徒の感じる抵抗感を指導者の立場で理解してほしいと願っている。いわゆる五線譜は便利である。しかし、それが唯一、最高の楽譜ではないことを知ってほしい。演奏者のニーズ、その音楽が持つ特異性によって、ふさわしい記譜法が存在すること、あるいは記譜という行為が必要のない場合があることも知ってほしい。

さらに、同じ楽曲であっても、そこに様々な思いが込められることがあり、その背景には人々の歩んできた歴史があること、また、地域がことなっても共通する部分が存在するという事も理解してほしいのである。これは音楽の特質の1つかもしれない。

学生たちは、楽譜によって音高と音価が示されることに慣れている。もちろん、音楽を専攻するためには必要なことである。しかし、それが音楽を伝える唯一の手段ではないことを知ってほしい。楽譜という音楽を伝えるための便利な手法も、その仕組みをよく理解していなければ必ずしも便利ではないのである。極論かもしれないが、楽譜の仕組みを知らなくても、音楽を楽しむことは可能であることを、音楽を専攻する人こそ知ってほしい。そしてさまざまな人々と音楽を共有することを楽しんでほしい。

地球市民育成の視点から考えると、音楽を専攻している自分と異なる音楽のとらえ方をする他者の存在に気づき、その立場に立って教材となる楽曲理解を深めることが、自分自身の音楽観を広げることにつながる。そして、その楽曲を生徒と共有することは音楽文化を介して生徒と共生することであるととらえることができる。

6. 結語 - 音楽科で地球市民としての意識を育てるための視点 -

これまでの実践を振り返り、音楽科が育てようとしている音楽文化に対する理解とは何かを改めて考えると、さまざまな音楽文化に対して寛容に接するとともに、その文化を営みの中で大切にしてきた人々や保持、発展さ

せようとしている人々に敬意を払うことにつながるのではないだろうか。この視点は自己の音楽文化はもとより、他者の音楽文化を認め、共生していくという、地球市民としての意識を育成することになるだろう。

そのために指導者として教師に必要なのは、音楽の構成要素を基にした楽曲分析にとどまらず、文化に接する態度を育てているという視点を持って、教材研究や単元開発に取り組む姿勢である。

また、児童生徒の発達段階に合わせて表現の楽しさや手応えに加え、知的好奇心や知識欲求に応えられるように他教科・他領域の学習活動や音楽科での既習事項・経験との有機的な関連を図る視点を持ち、学習活動を構想・展開していくことが必要である。

そのためには、教師自らの音楽的関心を特定領域の深化にだけ向けるのではなく、より幅広く音楽文化に対する関心を持ち、そこに自らを投じるためのさまざまなゆとりを持つことが必要である。これは、音楽文化の担い手である自己や他者を尊重することにつながるだろう。

今回指導事例としてあげた実践は、小学校・中学校・高等学校・大学に渡っている。しかし、この実践を全て経験している学習者は存在しない。筆者の教職歴に合わせて、それぞれの学校種で実践してきたものを発達段階に合わせて並べている。音楽科のカリキュラムとして考えるならば、学習者が継続的に取り組むことを想定したものが必要となるかもしれない。ただし、その実現はかなり難しい。それは、指導者自身の音楽経験やその時々興味関心の広がり方にも大きく影響されてしまうからである。しかし、そこに臆することなく目の前にいる学習者と活動を展開することを意識し続けることが肝要であると考え。

また、このような実践によって学習者にどのような学びや意識の変容があったのかを、長期的な視点で見取ることが必要である。それは、音楽の要素を理解することだけにとどまらず、地球市民としての意識を育成しようとすることを目指しているからである。事例としてあげた実践でも、学習者の変容はその後の他教科・領域での学習で見取れると予想されるものもある。地球市民としての意識は、いくつもの活動を重ねる中で育成されるものであると考える。そのような長期的な視点をもって、音楽科の学習活動で何が可能なのかを考え続けることに意味があるだろう。

注

- 1 吉田孝 (2011) 「中等科音楽教育法 (改訂版)」中等科音楽教育研究会編 音楽之友社。
- 2 宇多川晴義 (2001) 「新しい教育のパラダイムを求めて」『地球市民への入門講座 グローバル教育の可能性』宇田川晴義監修 三修社。
- 3 居城勝彦 (2016) 「3年生のまとめをしよう」東京学芸大学附属世田谷小学校研究紀要第48号。
- 4 桐原礼 (2014) 「小学校音楽教科書にみる「歌」に関わる教材の研究－音楽学習に置ける異文化理解に向けて－」帝京大学教育学部紀要第2号。
- 5 国際理解に役立つ世界の民族音楽 (2003) 若林忠宏監修 こどもくらぶ編集 ポプラ社。
- 6 居城勝彦 (2010) 「国際理解教育の視点を生かした中学校音楽科の取り組み」東京学芸大学附属学校研究紀要第37集。
- 7 「音楽のおくりもの 2・3上」教育出版。
- 8 居城勝彦 (2008) 「日系人と太鼓音楽における文化保持と変容－中学校音楽科における創作和太鼓での活用－」『国際理解教育 VOL.14』日本国際理解教育学会。
- 9 サンノゼ太鼓の芸術監督 P.J.Hirabayashi のインタビュービデオを活用。
- 10 「海を渡った日本人」海外移住資料館より紙芝居をアウトリーチとして使用した。
- 11 アリ・バホーズ作曲 内藤淳一編曲「MOUSA1」教育芸術社。(2013)
- 12 吉野亨 (2006) 「BRICsの一角で注目されるブラジルのことがマンガで3時間でわかる本」明日香出版社。

富野幹雄 住田育法 (2002) 「ブラジル学を学ぶ人のために」世界思想社。

13 DVD 「Pulse:a STOMP Odessey」 (2005)。

14 高橋矩彦 (2008) 「華麗に舞う格闘技カポエイラ入門」スタジオ・タック・クリエイティブ。

15 細谷洋子 (2015) 「アフロ・ブラジル文化 カポエイラの世界」明和出版。

16 柴田南雄 (2014) 「音楽史と音楽論」岩波書店。

17 森山良子作詞 BEGIN 作曲 島袋大採譜 音楽のおくりもの 2・3上」教育出版。

18 Puakea Nogelmeier/Keali'i Reichel 作詞。